

かながわの考古学

2011.3

財団法人 かながわ考古学財団

目 次

神奈川県における旧石器時代の遺物分布（その4）－B1層～L2層（1）－ 旧石器時代研究プロジェクトチーム ……………	1
神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅷ－後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その2－ 縄文時代研究プロジェクトチーム ……………	13
神奈川県内出土の弥生金属器（3）－まとめ－ 弥生時代研究プロジェクトチーム ……………	25
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（8）－通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介－ 古墳時代研究プロジェクトチーム ……………	37
神奈川県における古代の鉄（1）－生産関連遺物の集成－ 奈良・平安時代研究プロジェクトチーム ……………	51
神奈川の中世城館（3） 中世研究プロジェクトチーム ……………	65
近世民家の集成（8） 近世研究プロジェクトチーム ……………	73
個人研究論文 人物埴輪にみる地域相の分析と工人集団の復元－関東地域の人物埴輪を中心に－ 新山保和 ……………	85

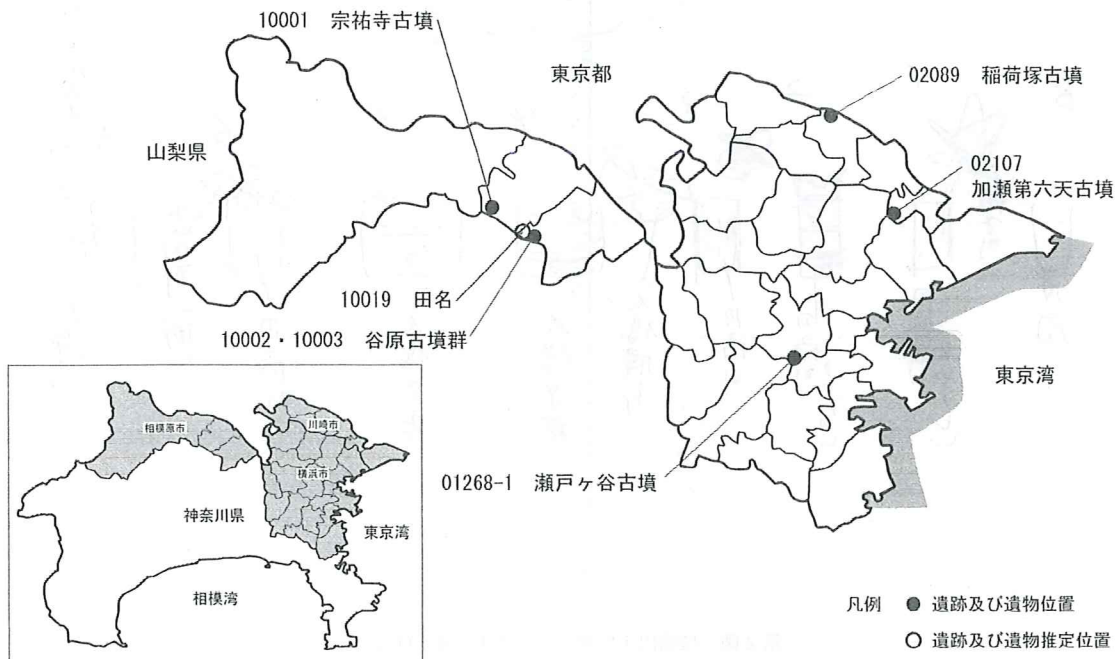
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（8）

一通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介

古墳時代研究プロジェクトチーム

例 言

- ・通称「赤星ノート」の神奈川県埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。
- ・研究紀要第16号には横浜市域にあたる01268-1番、川崎市域にあたる02089・02107番、相模原市域にあたる10001・10002・10003・10019番を掲載している。
- ・番号は埋蔵文化財センター年報14～18に記載されている番号に対応している。
- ・執筆分担は横浜01268-1番：植山英史、川崎02089番：新山保和、川崎02107番：小西絵美、相模原10001番：柏木善治、相模原10002・10019番：林 雅恵、相模原10003番：吉田映子が行った。
- ・各記述は「1. 赤星ノートの内容」「2. 記載資料の整理」の2つに大きく分け、1. の細目は〔調査（踏査）年月〕〔資料保管場所〕〔記載内容概略〕とし、2. は〔（遺跡及び）遺物（遺構）概要〕〔掲載図書〕〔掲載図書概略〕〔小結〕などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
- ・挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に関しても同様である。
- ・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のものが多い。



第1図 対象遺跡及び遺物位置図

年報番号 横浜市01268-1 瀬戸ヶ谷古墳(5) 横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷

1. 赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月] 1943・1950年

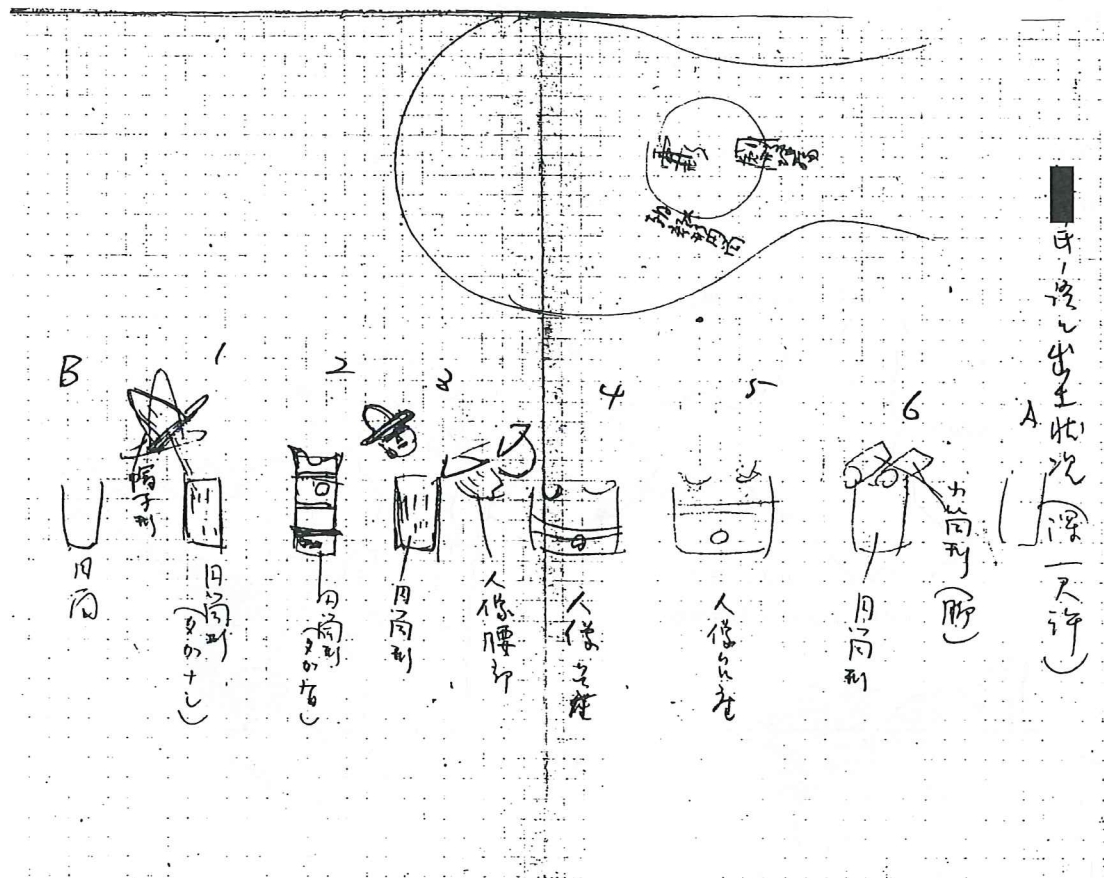
[資料保管場所] 東京国立博物館

[瀬戸ヶ谷古墳と赤星ノート4]

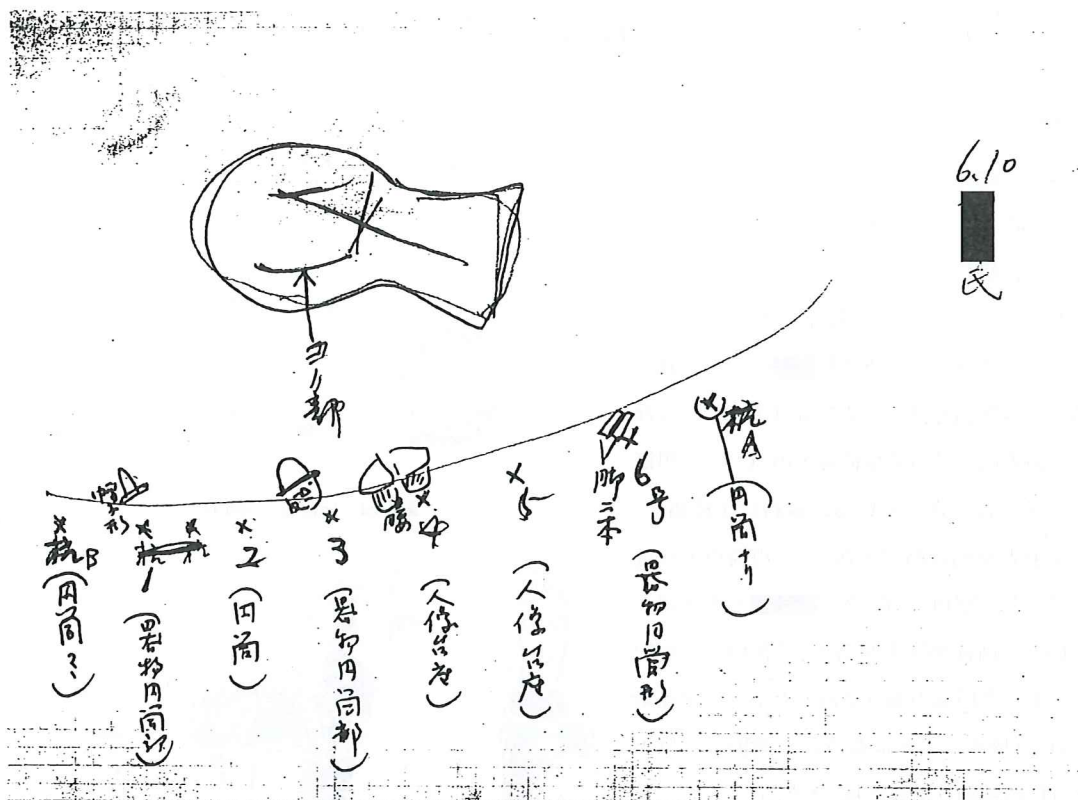
前回は01268-1・2②(後半)について紹介した。今回は01268-1・3について紹介する。本資料は大きさ16cm×20cmの3mm方眼ノートである。現状で27枚、54頁からなるが、最初の4枚は片面が方眼でなく、片面が4cm9マスの方眼紙が貼り込まれている。また、途中頁が切られている箇所が2枚と、別ページに継ぎ足して、折込図にしている箇所が2頁存在する。

表紙には、黒マジックで「保土ヶ谷古墳」「赤星」と書かれている。また、「保土ヶ谷古墳」の下にボールペンと思われる青字で「(昭和18年)」と書かれている。黒マジック下に同じ内容が、鉛筆で書かれた跡があり、それをマジックでなぞっている。また、「学習部」「記録」と判読不能の記載が黒マジックの2重線で消されている。マジックと青字の記述は、後に資料整理を行った際のものとして推定される。

裏表紙には青字で「発見 埴輪断片見取記録」と記載されている。1頁目は方眼の無い面で、位置図の下書きであろうか、途中で途切れている簡易な線画が記されている。2・3頁は見開きで、埴輪の出土状況の概略図が描かれている。記載内容から後円部の右側に並べられた埴輪列と推定される。右端に「■■■■氏の後と出土状況(深一尺許)」と記載される。上半に後円部の略図と「朝顔形円筒」と「剣形埴輪」の記載がある。



第2図 埴輪出土位置スケッチ①(縮尺60%)



第3図 埴輪出土位置スケッチ② (縮尺80%)

下半は、埴輪列のスケッチが描かれ、左側より「B 円筒」「1 円筒形 (タガナシ)」「2 円筒形 (タガ〇〇・ありか?)」「3 円筒形」「人像腰部」「4 人像腰部」「5 人像腰部」「6 円筒形」「小筒形 (脚)」「A」の記載がある (第2図)。

5頁も方眼で文様のスケッチ等が書かれているが、本古墳とは関連無いものと推定される。6頁は古墳の概略図に寸法が書かれているが、上から大きく「×」が書かれている。7頁も3・4頁と同様の後円部の出土位置と埴輪列の位置について描かれたものである。右端に薄青のインクで「6.10 ■氏」の記載がある。図は左から「杭B (円筒?)」「1 (器物円筒部)」「2 (円筒)」「3 器物円筒部」「4 人物腰部」「5 人物腰部」「6号 脚二本 (器物円筒形)」「杭A (円筒ナリ)」と書かれている。内容から先のスケッチと同位置のものと考えられ、「タガナシ」の円筒部が器物円筒部と正確に把握されていたことがうかがわれる (第3図)。また、この頁は鉛筆書きのものを黒の万年筆でなぞっており、以降の頁にも鉛筆スケッチを万年筆でなぞったものが見受けられる。8頁も方眼無し面に位置図と思われるスケッチがあるが、途中で途切れており、本古墳のものでは無い可能性がある。

以上、今回取り上げた方眼ノートの頁は、主に後円部西側の中腹に位置したと推定される、埴輪列のスケッチである。これらは、表紙の記載から昭和18年 (1943年) 時の調査時の状況であることが判る。そして、その資料を後で整理した痕跡が認められ、当時の状況を正確に残そうとした赤星氏の意図が伝わってくる。次回以降も本ノートのスケッチを中心に紹介を進め、1943年の調査内容について明らかにしていく。(植山)

引用・参考図書文献

- 赤星直忠 1979 「瀬戸ヶ谷古墳」『神奈川県史』20考古資料 神奈川県県民部県史編纂室
東京国立博物館 1986『東京国立博物館図録 考古遺物編』(関東III)

年報番号 川崎市02089 稲荷塚古墳 川崎市高津区下作延1605番地

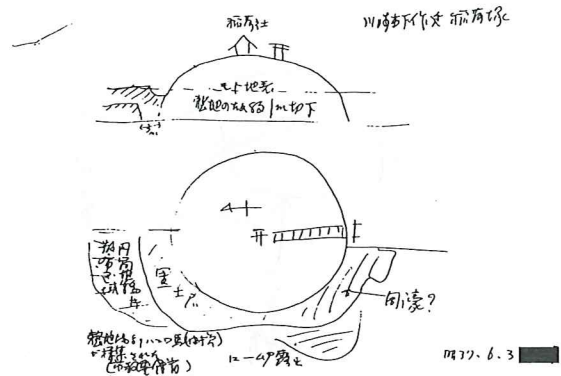
1. 赤星ノートの内容

[資料保管場所]

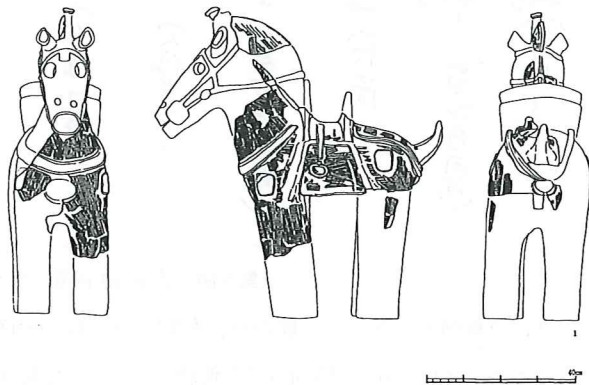
川崎市市民ミュージアム

[記載内容概略]

スケッチの入っていた封筒は、出版ニュース社のもので、神奈川県立博物館様と記されている。料金別納郵便のため年月日等の情報は無い。封筒表面に「川崎稲荷塚古墳（ハニワ円筒片）」とメモ書きされている。資料は1種類で、墳丘平面と断面の略図である。「川崎市下作延稲荷塚」と「昭和37.6.3」と記載されている。断面略図を見ると、「整地のため約1m切下」と周溝の幅「3m」とある。平面略図には、「周濠？」と記載された範囲に「黒土層」・「円筒埴輪片散布区域」とある。また、「整地場よりハニワ馬（破片）が採集された（市教委保管）」と記載されている。



第4図 稲荷塚古墳略図



第5図 稲荷塚古墳出土馬形埴輪（浜田 1991から引用）

2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

稲荷塚古墳の名称は、墳頂部に稲荷社が鎮座されていることに由来する。稲荷塚古墳は、多摩丘陵の先端に位置し、同じ台地上には縄文時代晩期の下原遺跡や神奈川県指定史跡である東高根遺跡が所在する。本古墳は、東西約20m、南北約20.5m、高さ約2.8mを測る円墳と見られる（浜田 1991）。本古墳の埴輪は、市営墓地の造営に際し、整地土の中から発見されている（川崎市教育委員会 1962）。埴輪の多くは破片資料であるが、その中で馬形埴輪が比較的残りが良く復元されている（第5図）。馬形埴輪は、鞍・泥障・鐙・尻繫・胸繫・手綱などを装着した飾り馬である。赤星ノートに記載がある馬形埴輪と考えられる。その他には、人物埴輪片と円筒埴輪片が出土している。円筒埴輪は、外面タテハケ調整で、内面はナナメハケ・タテハケを施している。口縁部の外反は弱く、筒形を呈する。突帯は低くつぶれたM字形で、スカシは円形を呈する。突帯上部はきちんとナデ消しているが、突帯下部は接合痕を留めている。底部径は11cmと矮小である。時期は、円筒埴輪の突帯が平たく形骸化し、底部径も小さいことから、6世紀末に位置づけられる。川崎市の古墳造営は、7世紀を境に横穴墓へと移行する。この点を考慮すると、本古墳の埴輪は、高塚墳に埴輪が伴う最後の古墳と考えられる。（新山）

引用・参考文献

川崎市教育委員会 1962 『社会教育要覧』 9

浜田晋介 1991 「川崎の埴輪Ⅰ」 『川崎市市民ミュージアム紀要』 第4集 川崎市市民ミュージアム

年報番号 川崎市02107 加瀬第六天古墳 川崎市幸区南加瀬所在

1. 赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月日]

赤星氏のメモに年月日の記載は認められない。

[記載内容概要]

①加瀬第六天古墳の「古墳模型製作仕様書」の写しと思われる資料一式、②赤星氏による同古墳の石室構造についてのスケッチ1枚、③同古墳墳丘実測図及び石室の実測図の写し各1枚。

①の「古墳模型製作仕様書」はB5サイズで模型の製作規模や材質、工法、納期等の詳細と共に、加瀬第六天古墳墳丘実測図（等高線入り）、同古墳石室及び石棺の実測図が各1枚、模型の断面模式図が描かれた模型見取図が1枚添付されている。仕様書は原本ではなく写しと考えられ、その最初のページの右上には、赤星氏のものではない筆跡で「赤星委員」とある。一方、同ページの余白部分には「(川崎 大六天古墳) 模型製作用 ■■■」と赤星氏によるメモが書き込まれている。

②には、赤星氏による同古墳の石室平面、石室の縦方向の立面及び奥壁の立面に関するスケッチと石棺のスケッチがあり、その付近には「切石乱積？」と記されている。

③の図面2枚については、①の仕様書に綴じ込まれている墳丘、石室実測図と同じものであるが、いずれにも赤星氏によって「県博物館準備局資料による」と書き添えられている。

①～③の資料が収められていた封筒には「滋賀民俗学会」とあり、同会から赤星氏宛てに昭和43年3月19日大津の消印で送られてきたものである。封筒の裏面には右端に「加瀬大六天古墳 径19m高4m 円墳横穴式石室 7世紀（公園立札）、中央には「〇〇「川崎市野川〇根古墳」（考古たちばな七号）」、左端には「考雑（27-7）川崎市加瀬における二基の古墳発掘（〇報）」とあり、これらの下部には「加瀬 大六天古墳測図 切石積石室」と記載されている。

2. 記載資料の整理

加瀬第六天古墳は現在の川崎市幸区南加瀬に所在する円墳で、同古墳の東方約20mには前方後円墳である白山古墳が位置する。同古墳の発掘調査は、隣接する白山古墳と共に1937（昭和12）年に三田史学会により実施された。その結果、加瀬第六天古墳は胴張り形の切石乱積の横穴式石室を埋葬施設とし、玄室には秩父地方で産出する緑色片岩製の組合式石棺が安置されていたことが判明した。石棺内からは十一個体分の頭蓋骨や四肢骨が出土し、瑪瑙製勾玉や琥珀製棗玉等の玉類、金銅製鈴や銅環、銅釧、刀子等の副葬品が発見された。また、棺外からも刀身や鏢等の刀装具、鉄鏃、須恵器臚等、多数の副葬品が出土している。同古墳が7世紀後半の築造であることが明らかになり、加瀬第六天古墳が白山古墳の陪塚という既存の認識を覆す成果となった。2基の古墳の発掘調査成果は、1953（昭和28）年に報告書として刊行された。

まず、赤星ノートと報告書を含む資料とを見比べると、古墳名の表記が異なっている点に気が付く。①の仕様書中の表記及び赤星氏の書き込みも含め、全て「大六天古墳」と記載されているのに対し、報告書は「第六天古墳」の表記になっており、『神奈川県史』等の資料もこのようになっている。同じ赤星ノートにある「川崎市加瀬山古墳分布」（年報番号02020）では、報告書等と同様に「第六天古墳」という表記になっている。なお、この資料は昭和54年11月8日に書かれたものである。赤星氏と相手方のやり取りの際に、おそらく何

らかの混乱があったのであろう。

次に、①・③の図面については、どれも報告書から引用あるいは転用されたものであることが分かっている。①中に書かれている古墳模型の納入時期には「昭和41年12月10日」とあり、加瀬第六天古墳の発掘調査や報告書刊行から大きく時間を隔てている。③には先述したように「県博物館準備局資料による」という書き込みがあることから、神奈川県立博物館開館に際し加瀬第六天古墳の模型製作を計画されたのではないかと推測される。

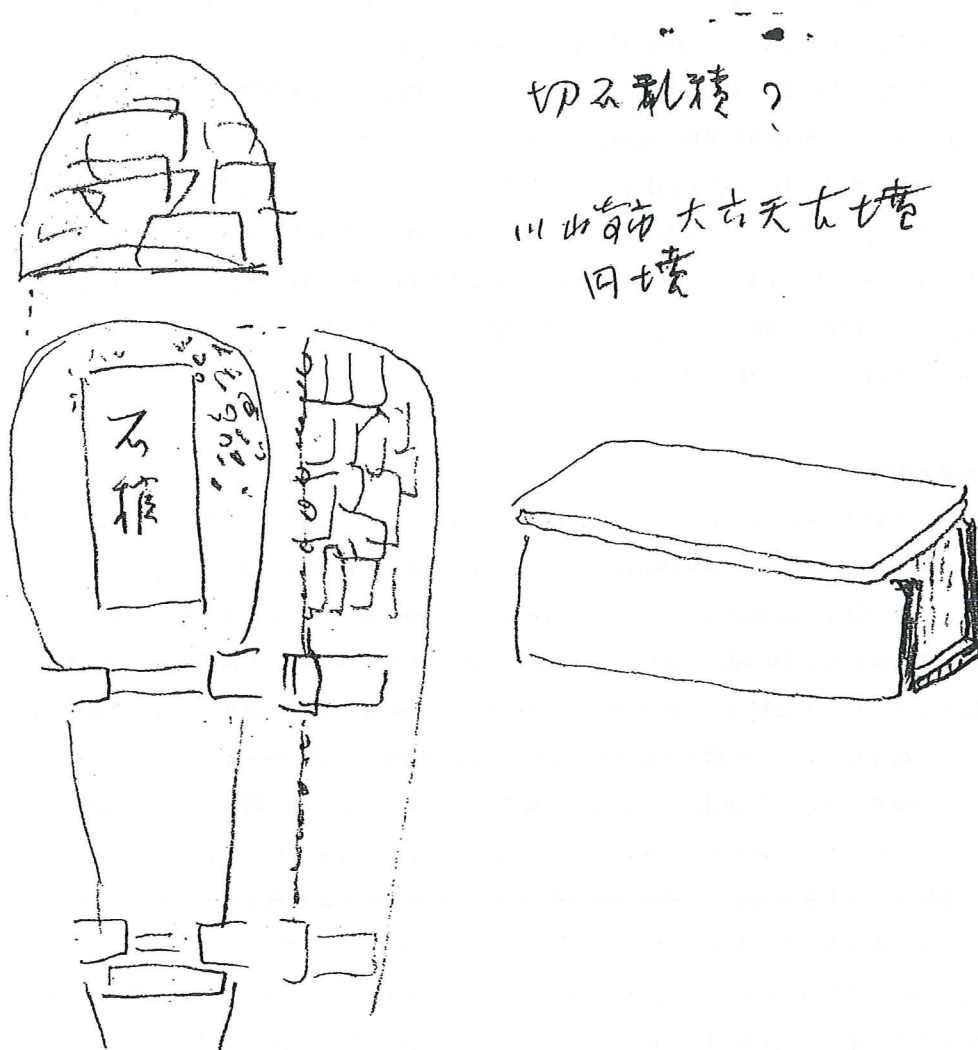
なお、加瀬第六天古墳の石室及び石棺は発掘調査終了後、日吉にある慶應義塾大学構内に移築されたが、その後戦禍に遭い一部が毀損したとの記述が報告書に記載されている。 (小西)

[掲載図書]

関連する資料が複数あるが、①～③の資料を掲載した図書は見当たらない。

参考・引用文献

- 松本信広他 1953 『考古学・民俗学叢刊第二冊 日吉加瀬古墳—白山古墳・第六天古墳調査報告—』 三田史学会
神奈川県県民部県史編纂室 1979 『神奈川県史』資料編20考古資料



第6図 第六天古墳スケッチ (S = 1/1)

年報番号 相模原市10001 相模原市宗祐寺古墳 相模原市田名1153

1. 赤星ノートの内容

宗祐寺古墳群は寺域基地内に存在した古墳群であるが、墓地開発により多くが破壊されている。円墳による群で、遺物は直刀・鉄鏃・刀子などが知られる。

[調査（踏査）年月]

資料が入っていた封筒には45円分の切手が貼られ、昭和43年12月の消印がある。また、台紙に張られた写真には撮影日として昭和46年の日付がメモされていること、県史編集室のゴム印が使用されていることなどからは1979年刊行の県史作成にかかる資料調査の一環で資料化されたと考えられる。

[資料保管場所]

資料中には「宗祐寺所蔵」と記される。

[記載内容概略]

No.1 直刀及断欠（図） 3本の刀が描かれる。上の二本に関して、「保存可成良し」と記される。

No.2 直刀 刀子（図） 大刀刀身、小刀などと共に鞘金具のような筒状の製品が複数描かれる。

No.3 尖根鉄鏃断欠（図） 「断欠によると大体20本前後と思われる」とメモ書きされ図が描かれる。

古墳位置図も描かれ、古墳はNo.1とNo.2と二基が記される。図の下には「宗祐寺基地内に古墳二基あり、第1号墳は一昨年（昭43）暮 ■■■氏、■■■先生らにて発掘せられたという、遺物は寺にあり、現地には一抱～頭位の河原石多く残存す。野石乱積の石槨を主体とするものの如し、第2号墳は一部を新しい墓にて崩され河原石を積上げてある。」と直筆で書かれている（第7図）。

No.1～No.3の右下には「出土 田名1153 宗祐寺基地内古墳」「相模原市田名1166 宗祐寺所蔵（住職 ■■■）」と記される。

写真A 「相模原市田名宗祐寺内古墳」と記される。台紙には管理するための印が押してあり、「県史編集室／主題・場所・フィルム・撮影年月日」などの記入欄があるが、フィルムの欄に「19」「12」と数字が記されるのみである。また、欄外には「8」の印が押されている。

写真B 「相模原市田名宗祐寺内古墳」と記される。台紙には管理するための印が押してあり、「県史編集室／主題・場所・フィルム・撮影年月日」などの記入欄があるが、フィルムの欄に「19」「6」と数字が記されるのみである。また、欄外には「8」の印が押されている。

写真C 「相模原市田名、宗祐寺基地内古墳出土品 宗祐寺蔵 昭46.3.6撮」と記される。大刀と鉄鏃と分けて撮影され、写し込まれた札には「相模原市田名 宗祐寺墳内古墳 宗祐寺蔵」と記される。

写真D 「相模原市田名宗祐寺基地内古墳群 右 破壊されてしまったもの（遺物寺にあり） 左 破壊寸前の古墳」と記される。

2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

遺構は、写真によると1基は破壊され、1基は破壊寸前とされる。遺構に関する記録は撮影された写真のみであり、遺物は原寸大とみられる大きさで描画される。

No.1には3本の刀が描かれ（第8図）、1・2は茎から切先まで遺存しており、1は刀長26.5cm、身幅3.2

cm、棟幅は関側が1.2cmで、身厚な重厚な印象となる。均等な両関で茎は直とみられ、切先は銹化による変化も図からは読み取れるが、ややふくらが張る形状と考えられる。2は刀長21.5cmで、身幅2.4cm、茎は直とみられ目釘穴が一穴確認される。3は茎を中心として欠失していることが考えられ、残存する全長は24.4cmである。

No.2には、4本の刀の断片と鞘金具とみられる筒状の製品が2点描かれる(第9図)。1は茎から刀身まで遺存しているが、図からは切先が欠失している状況が観察される。また、茎に被さるように筒金が描かれるが、鞘口の金具であろう。刀長はおよそ26cmで、写真からは刀身が折り曲げられていることが確認される。2は刀身のみで残存長は24cm、身幅は3cmである。3は関付近を中心に遺存し残存長12.3cm、4は茎とみられ残存長は6.9cmである。

筒金具は2点で、1に付されて描かれるものは6と同一であるとみられる。5が残存長4.1cm、内径2.7cm、6が長さ5.1cm、内径1.8cmであるが、銹化や木質の遺存などの状況は不明である。

No.3には鉄鏃が描かれ(第10図)、鏃身部の判明するものは、柳葉形もしくは長三角形である。いずれも長頭と考えられ、関は台形とみられるが棘状に描かれるものもあり、頸部断面形は長方形状である。図には8点が描かれるが、写真には断片ながら28点が写されているが、いずれも同形状の長頭鏃になることが考えられる。

[掲載図書]

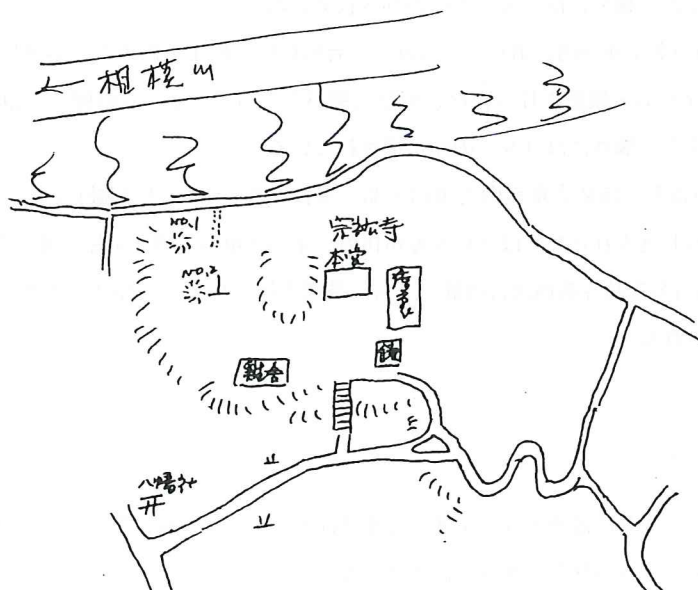
神奈川県県民部県史編集室1979『神奈川県史』資料編20考古資料

[掲載図書概略]

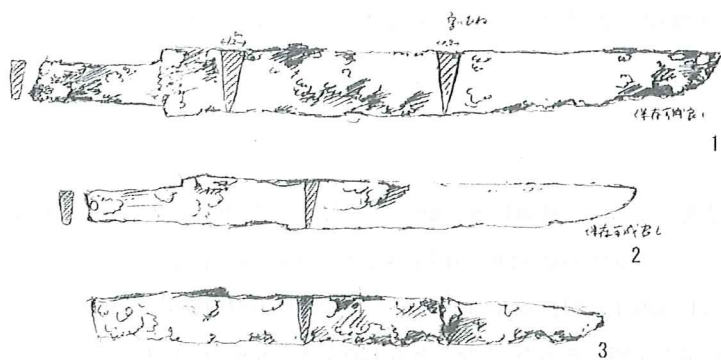
古墳群に関する概要のみが記載され、写真として「写真1」と、「写真3」の大刀の写真が一部をトリミングして使用されている。

[小結]

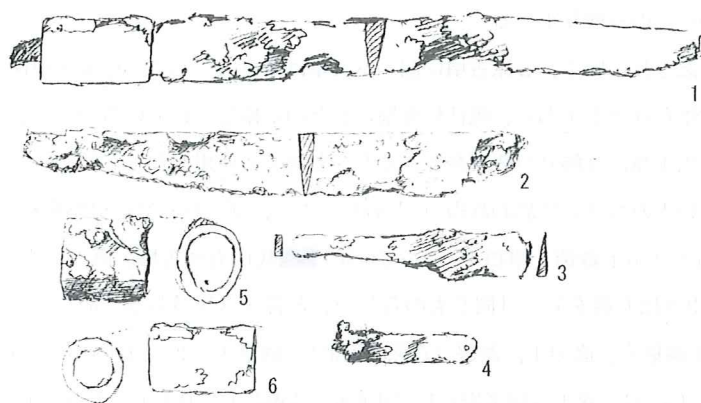
古墳の墳丘は不明であるが、大振りな石が使用されていることから横穴式石室であることが考えられる。遺物のうち、小刀や鉄鏃の様相からは6世紀末～7世紀初頭という時期が該当する。(柏木)



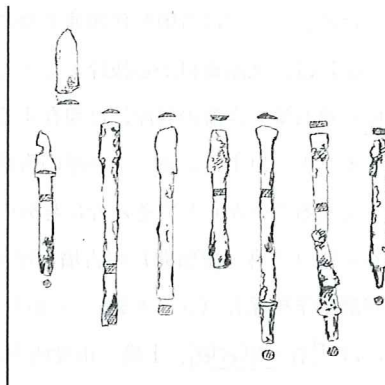
第7図 古墳位置図



第8図 出土遺物(その1)



第9図 出土遺物(その2)



第10図 出土遺物(その3)



写真1 破壊寸前とメモされた古墳



写真2 破壊されてしまったとメモされた古墳

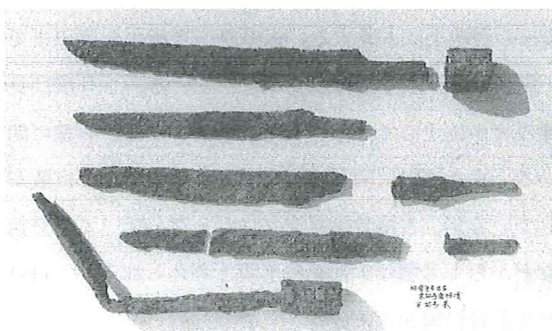


写真3 出土遺物(刀類)

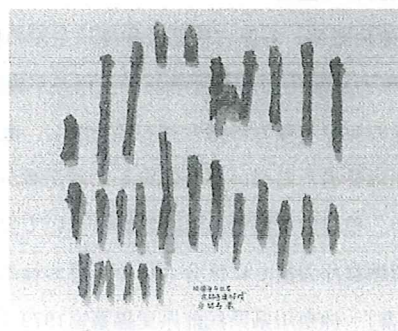


写真4 出土遺物(鉄鏃)

年報番号 相模原市10002 谷原古墳出土鉄鏃ほか、磯部五番地古墳 相模原市上溝、磯部

1. 赤星ノートの内容

[資料保管場所] 相模原市教育委員会

[記載内容概略] 封筒は神奈川県立図書館のもので、横須賀市公卿町の赤星氏自宅に宛てられている。料金後納郵便のため日付は不明である。中には、B5版の紙を20~30枚程束ねたメモ帳が3束同封され、いずれも表裏に記載がされている。表紙には「相模原市資料、昭和39年(①)」、「相模原市追加資料(②)」、「相模原市野帳(③)」と記されている。②は年号が不明であるが、少なくとも①の年代より後の記録と考えられる。③は資料の最後に昭和45年の記載がされている。内容は多岐に亘る時期の遺構、遺物について記載されているため、ここでは古墳時代関連遺物についてのみ取り上げる。

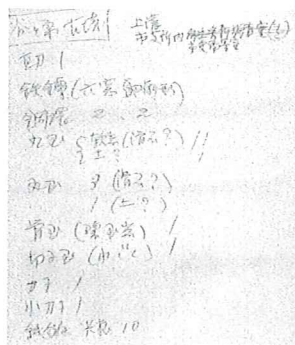
①には、文献資料から抜粋したメモが記されている。谷原古墳に関する文章は2カ所である。『郷土相模原』第八集、当麻の谷原には現存する古墳だけでも十あり、既往に発掘されたのが確認されているのをあわせると十三以上もある。…谷原の古墳の出土品は耳飾りが銀鍍金であるし、首飾りに使用した玉も口雲石などであることからしてそんなに身分の高い人のもノとは思われぬ。」とある。また、『さがみはら史跡散歩』谷ヶ原(当麻・塩田間)の古墳、径4m~2m十数個、昭和4、3、23□□■■氏所有地古墳、直刀出土、麻溝小学校保存(5口と鏝)」とあり、引き出し線をして「同じものらしい」と書き込みがある。別ページには「谷ヶ原古墳、上溝、市役所内市史編集室、直刀1、鉄鏝(六窓卵倒形)、銅環2、2、丸玉軟岩(滑石?)11、土?1、丸玉3(滑石?)、1(土?)、管玉(碧玉岩)1、切子玉(水晶)1、刀子1、小刀子1、鉄鏃尖根10(第11図)」と古墳出土遺物について列記してある。この内、鉄鏃にはスケッチが残されており、「10本同型」とメモされている(第12図)。その下には古墳群の配置を示す概略図(第13図)が描かれ、地番と共に「直刀出土(麻小)」のメモ書きがある。③の1ページ目には、11月から1ヶ月間の現地踏査の日程と思われる記載がされ、別ページには古墳出土品についての記述がされている。「谷原第1号墳出土(市史編集室)、明治時代に乱掘、直刀2、刀子1、鏝1、銅環3、丸玉15、小玉2、切子玉1、琥珀玉残欠1ヶ分、鉄鏃(尖根)断欠とも13、管玉1」とある。その下には「磯部5番地出土(市史編集室)、(■■君発掘の内)、直刀3、鏝1(残欠)、金環2、切子玉2」とある。また、別ページには再び谷原古墳について触れ、「谷原古墳群、10基よりなる、無量光寺西方に張り出した台地、相模原唯一のもの」と記している。さらに別ページには、田名出土曲玉に関するメモがあるが次の年報番号10019と併せて報告する。

2. 掲載資料の整理

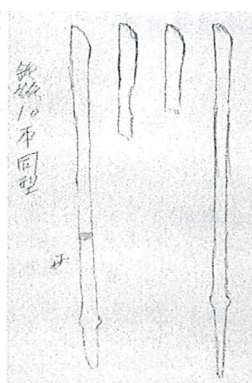
[遺構・遺物概要] 谷原古墳群は相模川左岸の標高約50mの台地上に占置する。相模原市当麻から塩田までの600m程の地域に広がる古墳群で、14基が確認され、東側の1~4号墳の調査がされている。1号墳は長軸5m程の河原石積み横穴式石室を有し、直刀、銅環などが出土している。赤星氏のメモには、石室に関する記述は見当たらないが『県史』には記載がされている。また直刀に関しては昭和39年と45年とでは数が異なるが、現存は1振である。鉄鏃について尖根式としているが、古墳時代研究プロジェクトチームの分類では長頸鏃群片刃箭cに区分されると思われる。以上などから1号墳は7世紀後半頃と考えられる。(林)

[掲載図書] 神奈川県民部県史編集室1979『神奈川県史』資料編20考古資料

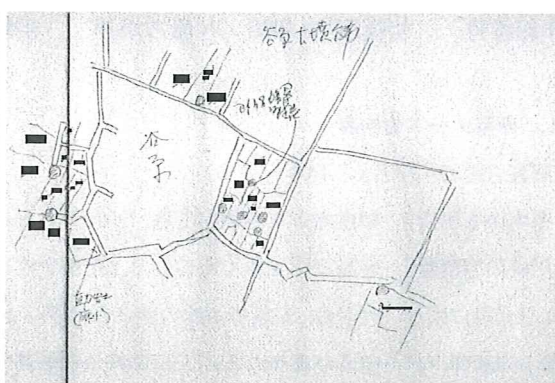
[掲載図書概略] 出土遺物の写真が図版643に掲載される。



第11図 谷原古墳出土品



第12図 鉄鍬スケッチ



第13図 古墳群配置図スケッチ

参考文献 谷原遺跡調査団1972『谷原』

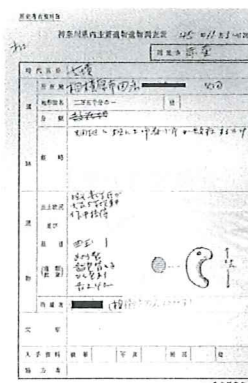
古墳時代研究プロジェクトチーム1994「神奈川県における墳墓出土の鉄鍬について」『かながわの考古学』第4集

年報番号 相模原市10019 田名出土勾玉 相模原市田名

1. 赤星ノートの内容

[資料保管場所] ■■■■■氏所蔵

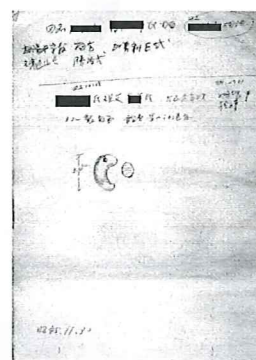
[記載内容概略] 封筒は東京国立博物館にて昭和50年3月～4月に開催された醍醐寺密教美術展のもので、宛先等はない。封筒の表には「相模原市田名 畑出土曲玉」と記されている。中には泉史編集室の「神奈川県内主要遺物調査表」と印刷された台紙に詳細が手書きされている(第14図)。日付は「45年11月30日」、所在地は「相模原市田名 ■■■■■、畑」とある。概略には「畑地と口に土師器小片が散在するだけ」と記載される。出土状況並び品目の欄には「祖父■■■■氏が大正5年頃耕作中拾得、曲玉1、めのう製、飴色背にみかん色あり、長2.4cm」と記し、トレーシングペーパーに描かれたスケッチを貼り込んでいる。所蔵者は「■■■■■(相模原市田名■■■■■)」である。また台紙に貼られた写真(写真5)も同封され「相模原市田名、■■■■■氏裏畑、曲玉出土の畑、昭45、11、30」とメモ書きされている。また前述の10002の資料③で記載したメモ書きには「田名■■■■■氏畑(田名■■■■■畑地)」、「田名■■■■■、■■■■■氏祖父■■■■■氏、大正5年頃、畑作中拾得、畑■■■■■、メノウ製勾玉、飴色、背にミカン色有り」と記載され、スケッチが描かれている(第15図)。下段に「昭45. 11. 30」と日付が書かれ、年報番号10019の資料として報告する勾玉と同一のものと考えられる。



第14図 勾玉資料



写真5 勾玉出土地写真



第15図 年報番号10002 勾玉メモ

2. 掲載資料の整理

[遺構・遺物概要] 相模原市田名周辺には宗祐寺古墳を始めとして数多くの古墳が知られているが、勾玉1点出土という情報だけでは出土古墳の名称を特定することは難しい状況である。

(林)

参考文献 神奈川県県民部県史編纂室1979『神奈川県史』資料編20考古資料

年報番号 相模原市10003 谷原古墳群 相模市南区谷原

1. 赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月] 不明

[遺物保管場所] 相模原市立博物館所蔵(2010年11月13日現在)

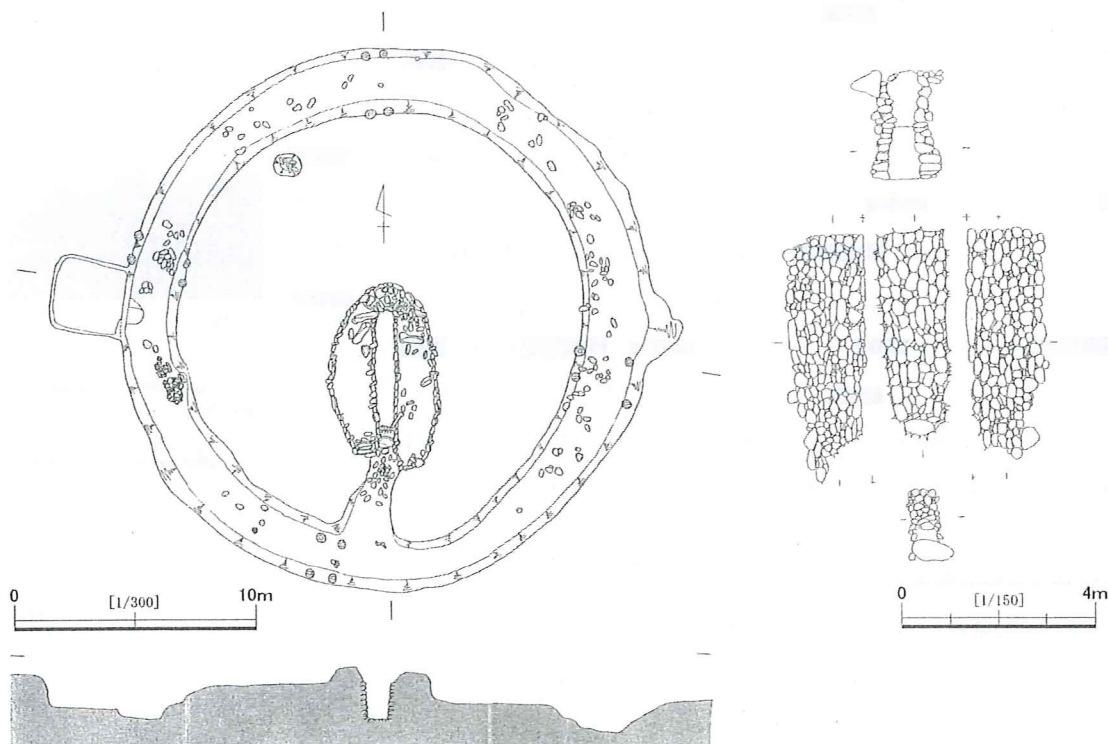
[記載内容概略] 資料は図1枚である。B4用紙3枚を横長に貼り合せた用紙に鉛筆で遺物のスケッチがされる(第17図)。財団法人五島美術館の館名が印刷されたA4版封筒に収められ、表には「神奈川県立博物館学芸部御中」と宛名が書かれる。玉川局料金別納郵便のため消印がなく、年月を示すものはない。裏には「相模原市谷原古墳」とペンでメモ書きされる。図の詳細は以下の通りである。

大刀(直刀)を横長に配し、下にその大刀の刀装金具(鉄釰・鐔)、刀子、鉄鏃、各種装身具類が並べて描かれる。右側余白には「谷原第1号墳出土 市史編集室」とある。各遺物脇には説明が付されるものもあり、「碧玉岩、水晶環玉、こはく藁玉断欠、淡黄土色、淡黄土色の表皮あり、その他不透明淡口色蠟石?、黒・淡桃の斑、凝灰岩風化したような色 ガラス片の如きもの斑となる、黒土玉、金環 鍍銀、玦状、刀子、他8断欠あるも尖腸なし、粗布、刀子身、茎、他断欠」などと書かれている。法量についての記載はないが、遺物を置いて外形をなぞったような痕があることから、ほぼ原寸大で描かれていると思われる。

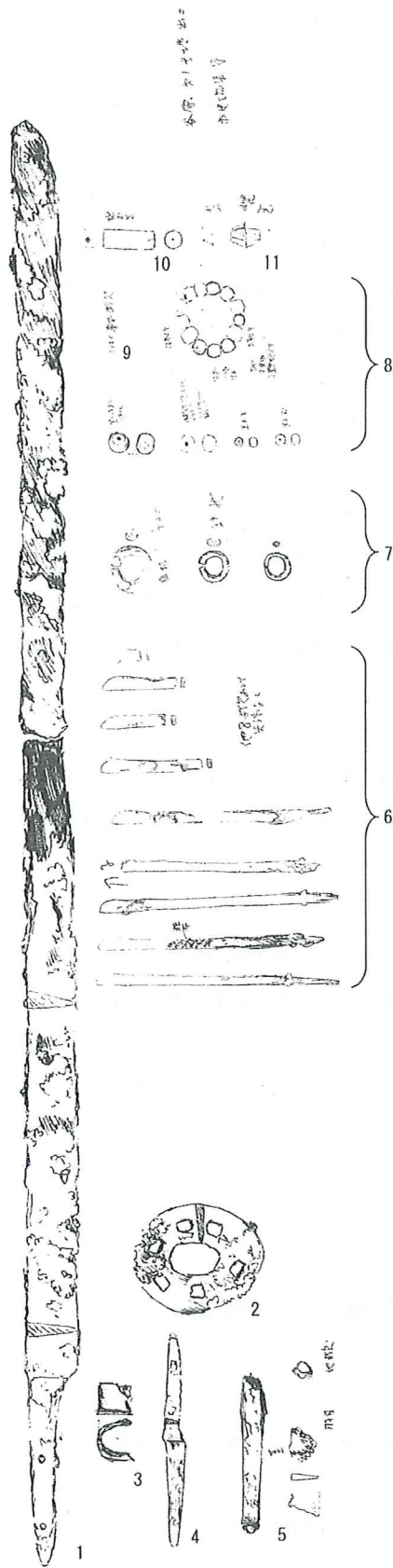
2. 記載資料の整理

[遺跡および遺物・遺構概要]

谷原古墳群は古墳時代終末期の古墳群として知られる。相模野台地西端の、相模川本流と八瀬川に挟まれ



第16図 谷原1号墳平面図・石室壁体部および床平面図(『谷原 神奈川県相模原市谷原遺跡の調査』より)



第17図 谷原1号墳出土遺物（原図の1/4）
※遺物番号加筆

た標高50m前後の台地上、相模原市塩田から当麻にかけての約600mの範囲に構築された14基の円墳からなる。当赤星ノート（以下「ノート」と記す）の資料はこのうちの1号墳の出土遺物である。

1号墳は1959年5月に市教育委員会によって発掘調査（第1次調査）が行われた。1964年刊行の相模原市史に一部掲載されたのち、1971年8月に行われた再調査（第2次調査）の記録と共に翌年『谷原 神奈川県相模原市谷原遺跡の調査』（以下「報告書」と記す）にて報告されている。なお、現在1号墳は相模原ポンプ場（相模原市南区当麻41番地）内に全面保存されている。

第16図は報告書に掲載されている1号墳の平面図および石室の図である。直径20～21.5m、溝幅2～2.5mの周溝を持つ。周溝覆土中には礫の散布が見られる他、おおよそ東西南北の4箇所に、径20cm前後、深さ25cm前後のピット4本が溝を跨いで対をなすように検出されている。埋葬施設は無袖型の横穴式石室で、南に向けて開口し、主軸方位はほぼ真北である。外形は約6.5m、幅約4.5mを測る。羨道部と玄室との区分は不明確ではあるが、室内長は約4.13m、幅は奥壁部で1.43m、玄門部側が約1.0mと計測される。

報告書による出土遺物は「碧玉製管玉（1）・鍍銀銅製耳環（大1）・鍍金銅製耳環（中小2）・水晶切子玉（1）・琥珀玉破片（1個分）・丸玉（15）・土製小玉（2）・鉄鏃（12）・刀子（2）・鏢（1）・目釘（1）・鉄器（2）・刀破片（2）・直刀（1）・人歯（7）」である。第2次調査で金銅製耳環（小1）が追加され、耳環の総数は4個であると書かれている。

以下、報告書を参考に各遺物の詳細を記す。1は直刀で、刀身中央付近で破断され刃先に若干の欠損があるがほぼ全身が遺存する。刃部は平棟・平造で、茎には目釘穴が2穴ある。茎尻はやや尖る。刃部と茎部との境界である関は刃側が大きく落ちるいわゆる刃関を呈するが、背側も微細な落ちが観察される。刃先の形状はいわゆるカマス鋒に近いと思われる。残存長88.4cmを測り、刀長76.0cm、刀部幅約2.8cm、棟厚0.7cm、茎長12.4cm、茎厚0.5cmである。報告書には関部に幅1.8cmにわたり付着する木質についての記述が詳細にされている。2・3は共に1の刀装具であると思われる。2は鏢で六窓の透孔を持つ倒卵型、長径8.4cmを測る。図では窓の位置に片

寄りがみられ、八窓の可能性もある。3は鏝で断片としての残存である。4は刀子で鋒をわずかに欠損する。復元全長13.3cm、刀長6.8cmを測る。5も刀子で上下に2分割して描かれ「茎・刀子・他断欠」とある。報告書の実測図では1片が追加され3片が接合した形となる。平棟平造で関は刃関、茎先近くに目釘がつき、茎には身と並行する木質を一部残す。全長28.2cm、刀長18.0cm、身幅1.6cm、棟幅0.35cmを測る。6は鉄鏃である。図には鏃身部8本が並び、「刀子 他8断欠あるも尖腸なし」とある。報告書では精査した結果10本分となっており、その内9本は棘篋被を有する片関片刃箭式である。「長頸鏃出現以降の県内古墳出土鉄鏃分類試案」(古墳時代研究プロジェクトチーム1994)による分類によれば「長頸鏃群片刃箭a」が7本、「同b」が2本となる。また、図に「粗布」とあるように、篋代に繊維質を巻いた痕跡をとどめるものが若干あり、報告書には布の分析結果が掲載されている。それによると平織の麻布であり、鉄鏃はまとめてこの布に巻かれていたと推測されている。7は耳環で大中小と1個体ずつ描かれる。「小」と同質・同サイズのものが第2次調査で1つ追加される。大は「金環・鍍銀」とあるが、銅製で銀メッキされており、最大径28.5mm、断面最大径7.0mmである。中・小は共に金銅環で最大径19.5mm・17.5mmである。8は丸玉で合計17個の内訳は、滑石製2、凝灰岩製1、輝緑凝灰岩製12、土製小玉2である。9は図がなく「こはく棗玉断欠」とある。当初よりすでに復元不可能なほど破片化していた。10は碧玉製の管玉で、長さ32.5mm、胴部径12.5mm、孔径約3.5mmである。11は水晶製切子玉で、最大長19.5mm、最大幅14.5mm、六面造りで穿孔は片面からである。

遺物は現在、相模原市博物館収蔵庫に保管されており、鉄製品については保存処理が行われている。今回、報告書とノートの図および博物館所蔵遺物の三者を照合した結果、遺物数・内容はほぼ合致していた。ノートが描かれた時期は、耳環が3個だけであることや右端の「市史編集室」のメモ書きなどから、1次調査直後、市史編集にあたり遺物が市史編集室に保管されていた期間であると考えられる。

遺物の組成はいわゆる7世紀代の古墳としては通有なものであろう。今回は博物館の協力のもと資料を実見する機会を得、先に記したように保存処理により50年が経過した現在でも良好な状態の遺物を確認することができた。また1号墳のような、古墳周溝にピットが配置される例は珍しく、興味深いものである。今後とも当資料の活用がなされることを期待する。谷原古墳群は調査例が少ない神奈川県において、県北部の古墳の具体像を示す良好な資料と言えよう。(吉田)

[掲載図書]

谷原遺跡調査団1972年 『谷原 神奈川県相模原市谷原遺跡の調査』

相模原市1964年 『相模原市史』資料編1 第一章 第三節 谷原古墳群とその被葬者

参考文献

古墳時代研究プロジェクトチーム 1994 「神奈川における墳墓出土の鉄鏃について」『かながわの考古学』第4集 神奈川県立埋蔵文化財センター

柏木善治 2008 「副葬大刀から見た相模の地域像」『神奈川考古 第44号』神奈川考古同人会

研究紀要16

かながわの考古学

発行日 2011(平成23)年3月31日

発行 財団法人かながわ考古学財団

〒232-0033 神奈川県横浜市南区中村町3-191-1

tel : (045)-252-8689 fax : 045-262-8162

<http://kaf@kaf.or.jp>

印刷 野崎印刷紙器株式会社

KANAGAWA NO KOUKOGAKU

Vol.16

(Bulletin of KANAGAWA Archaeology Foundation)

CONTENTS

Project Team for Paleolithic Studies: Paleolithic Artifacts in Kanagawa Prefecture Distribution (4) Layer B1 ~L2	1
Project Team for Jōmon Period Studies: Change of the Jōmon Culture in Kanagawa Prefecture (VIII): An Example in the first part of Late Period. An Aspect of the Horinouti-Type Pottery Period, Part 2	13
Project Team for Yayoi Period Studies: The Corpus of Yayoi Era Metaltool in Kanagawa Prefecture (3)	25
Project Team for Kofun Period Studies: Track of Dr. Naotada Akaboshi, A Pioneer of Archaeological Research in Kanagawa Prefecture (8): A Report of Materials of the Kofun Period in the So-called "Akaboshi Note"	37
Project Team for Nara-Heian Period Studies: Hardware in the Nara and Heian Periods in Kanagawa Prefecture: The Corpus of iron manufacturing artifacts	51
Project Team for Medieval Age Studies: Castle Site in the Medieval Age in Kanagawa Prefecture (3)	65
Project Team for Early Modern Age Studies: The Corpus of Common Houses in the Early Modern Age (8)	73
Niiyama Yasukazu: The Analysis of the Aspects of Region and Reconstruction of the Workman Groups from the view point of the <i>Jinbutsu Haniwa</i> : with a central focus on <i>Jinbutsu Haniwa</i> in the Kanagawa Prefecture	85

March, 2011

KANAGAWA Archaeology Foundation

Yokohama, Japan